最優秀賞

# 父の仕事

岩手県 盛岡市立仙北中学校二年　鈴木 孔也

「なんでそんな気持悪い仕事ができるの。」

僕は幼いころに父に言ってしまった。

僕の父は、「納棺師」という仕事をしている。納棺師とは、人が亡くなった後に、最後のお見送りを手伝ったり、化粧をしてきれいにするなど、とてもすごい仕事だ。僕はそんな父の仕事を侮辱してしまったことを今でも覚えている。あの言葉を口にした瞬間父は悲しさと怒りの二つの表情が合わさったかのような顔をしていた。でも僕が幼なかったからか、「ごめんな」と言っていた。そのときの僕には、申し分けなさは少しもなかった。むしろ、「はやくやめてくれないかな」とか、「気持悪っ」としか思っていなかった。だが僕は父の仕事のすごさを知ることになったのは、小学一年生ぐらいのときだった。

僕の曽祖母が亡くなった。僕は人の死と向き合うのが初めてだったため、混乱して素直に泣くことができなかった。すると、僕の隣に座っていた父が立ち上がり、

「みんなで最後に今までよりも、もっときれいになったおばあちゃんを見よう。」

と。すると父は職場から、何やら色々なものをもってきて、おばあちゃんの前に立ち、一礼をしてからあることをした。それは化粧だった。僕はそんな父を見て、「何をしているのだろう」と、不思議に思っていた。

父の作業は一時間程度で終わった。みんなでおばあちゃんを見ると、亡くなったとは思えないほど大人っぽくなり、若々しくなって、今にも動き出しそうで、笑っているようにさえ見えた。それを見て、今までたまっていたものが一気に目からこぼれた。あのときのおばあちゃんの笑顔は今でも目に焼きついている。あの笑顔は、僕が遊びに行ったときのうれしそうな表情と、まったく同じだったので色々なことを思い出してたくさん泣いた。

父はそんな僕を優しくそっとだきしめてくれた。あのときの優しいぬくもりは今でも忘れていない。僕は父の仕事を理解しないで、自分勝手な思い込みで言ってしまったあの言葉で、父がどれほど悲しんだのかを想像することができた。化粧した後もたくさんの人が見てほほえんだり、はだに手を当ててみたりするなど、多くの人の心を動かした。父は本当にすごいと思った。その後、僕は父に謝った。すると父は、

「今回のことを通して、命の尊さを知れたらいいよ。」

と言った。僕はその言葉から多くのことを学んだ。

それは日々生きていられる環境への「感謝」だ。今ある日常が当たり前と思わず、一日一日を大切に生きていくことが重要だと感じた。

僕はそんな父の仕事をしている姿を間近でみて、「納棺師」という仕事は、大事な方を亡くした人々の心の支えとなっている仕事だなと感じた。